まわりみち

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まわりみち

【Ｎコード】
Ｎ５８４４Ｔ

【作者名】
さら

【あらすじ】
「幸せ」って、実はすぐ近くにあるのかも・・・自ブログからの転載です。

（前書き）

「愚者の楽園」というお題をいただいて書いたお話です。

『あなたの楽園は、どこですか？』

昨日の夜、ネットで偶然見かけた言葉。それをなんとなく思い浮かべながら、海沿いの道をひとりで歩く。

楽園――青い海、青い空、二年前に彼氏と行ったリゾートアイランド。

まだ笑って話せないような過去を、ふと思い出し、あわててあたしは頭を振る。

小さな漁港の先に広がる、茜色の海。すぐ後ろの山では、緑の木々が五月の風に揺れる。海と山に挟まれるように、こぢんまりと並ぶ古びた家々……。

そういえば、こんな田舎町でも、子どもの頃のあたしにとっては、楽園のような場所だったのかもしれない。

近所の子を引き連れて、日が暮れるまで遊びまわった。海も、山も、空き地も原っぱも、全部あたしたちのものに思えた。

今みたいに、塾や習い事に通っている子はいなかったし、なにをして遊ぼうか、どこに行って遊ぼうかって、毎日考えて妙にわくわくしていた。

ちーちゃん、かずちゃん、ヒロキにナツ……あの頃遊びまわっていた仲間は、今ごろどうしているのだろう。

そういえば二つ年下の男の子、ナツは、いつもめそめそ泣いていたっけ。

波打ち際から、ちょっと離れた岩によじ登った日。夕方になったら潮が満ちてきて、ナツは怖がって、あたしにすがりつくようにし

て泣き出した。
「ナツはもう連れてかない。だってすぐ泣くんだもん」
浜辺に戻ってあたしが怒ったら、ナツは唇をぎゅっとかみしめて、鼻をすすりながら、あたしのあとをついてきた。
へんなやつ……そう思いながらも、あたしはナツの子守り役のような形で、ずっと毎日遊んでいたのだ。

新しい制服を着て、隣町の高校に通い始めた頃、あたしは電車を乗り継いで、初めて東京に行った。
かっこいいビル。たくさんのお店。おしゃれな人たち。
何もかもが新鮮で素敵に見えて、生まれ育った海辺の町が、一瞬にして、ダサくてカッコ悪い町に思えた。
高校を卒業したあたしは、迷わず東京へ出た。
地元の友達と別れることに、なんの未練もなかった。むしろ、「あたしはあなたたちとは違うのよ」みたいな、へんな優越感を持っていた。
最後にバス停で会ったナツは、もう泣いていなかった。

あれから十年。
あたしは憧れの街でがむしゃらに働いて、いくつかの恋もした。
それなりに楽しいこともあったけれど、それだけじゃなかった。
職場の人間関係に傷ついて、五年間付き合った彼氏と別れて、あたしは情けないことに、この町に逃げ帰ってきたのだ。
田舎臭くて、カッコ悪くて、大嫌いに思えたこの町に……。
東京に出てわかったのは、あそこはあたしにとっての、楽園ではなかったってこと。

ミャーって野良猫が泣きながら、のんびりとあたしの足もとを素通りしていく。
海から吹く潮風が、あたしの短く切った髪をさらりと揺らす。

その時、あたしの後ろを自転車が通り過ぎて、少し行ったところで止まった。

「ゆきちゃん？」

名前を呼ばれて振り返る。

「ゆきちゃんじゃねぇ？」

「……もしかして、ナツ？」

自転車から降りた男の人が、あたしの前で、にかっと笑う。

「そう、ナツだよ。ゆきちゃん、東京なんか行っちまったから、もうおれのことなんか、忘れたかと思ってた」

ナツが自転車を止めて、あたしの隣に来た。あたしはあわてて顔をそむける。だって、あたしの目には、きっと涙があふれていたから。

ナツはなんにも言わないまま、そんなあたしの顔をのぞきこむ。

「見ないでよ」

「なんで？」

あんたに泣き顔なんか見られたくないもの。

「あのさー、ゆきちゃん」

ナツが道沿いの堤防に手をかけて、白い波しぶきを見ながらあたしに言う。

「泣きたいときは泣いたらいいよ。我慢することなんかねぇって」

久しぶりに聞くナツの声。なんとなく心が落ち着くのは、どうしてだろう。

「おれ、ヘンにカッコつけて我慢して、後悔したことあるからさ」

「あんたが我慢したことなんかあるの？　いっつも泣いてたくせに」

あたしの鼻声に、ナツが、ははっと笑う。海鳥があたしたちの頭の上を、風と一緒に通り過ぎてゆく。

「みっともなくてもいいから、どこまでもついていけばよかったかなぁなんて思った……ゆきちゃんが東京行ったとき」

ぼうっとした頭のまま、横を向く。ナツはあたしの顔を見ることなく、目の前に広がる海を眺めている。
あたしはナツの横顔を見ながら、ナツの言った言葉の意味を考える。そして、胸をドキドキさせている。
肩が触れそうなほど近くにいるのは、あたしの知らないナツ。いつもあたしの後を泣きながらついてきたくせに、いつのまにかこんなに大人になっちゃって……。

「なに？」
突然振り向いてナツが言う。
「今、おれに見とれてた？」
「なわけないじゃん！　バカ！」
背中を向けて歩き出す。鼻先をかすめるのは、懐かしい潮の香り。
ナツが結婚したって噂は、聞いたことがない。ナツ、彼女いるのかな？　今、好きな子はいるのかな？
そんなことを考えている自分に気がついて、どうしようもなく恥ずかしくなる。
「ゆーきちゃん」
あたしの背中に声がかかった。
「一緒に帰るべ？」
夕陽の中で、あたしに笑いかけているナツを見た。そうしたら、なんにもないこの町が、なんだか素敵な場所に思えてきた。
「しょうがない。一緒に帰ってやるか」
笑いながら自転車を押す、ナツの半歩後ろをゆっくり歩く。気づかれないように鼻をすすっているあたしに、ナツはさりげなく歩幅をあわせてくれる。
いつのまにか、あたしがナツの後ろを歩くようになっちゃった……だけど、これはこれで、なんとなくいいものかもしれないな……。
波の音が遠く近く、あたしたちふたりを包み込んでゆく。

『あなたの楽園は、どこですか？』

まわり道いっぱいしたけれど、あたしの楽園は、案外すぐ近くにあったみたいだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5844t/

まわりみち

2011年5月27日10時55分発行